

予選審査に関するコメント

第37回高専プロコン 香川（高松）大会
審査委員長 大場 みち子

第37回全国高等専門学校プログラミングコンテスト香川（高松）大会の予選審査を終えるにあたり、応募された学生の皆さん、ならびに日頃から熱心にご指導くださっている教員・関係者の皆さまに、心より敬意を表します。今回は、課題部門59件、自由部門56件、競技部門56件、合計171件の応募があり、総参加校数も60校となりました。課題部門が前回から大きく増加し、競技部門にも高い参加意欲が示されるなど、全国の熱気を改めて感じる予選審査となりました。

課題部門では、テーマ「ICTを活用した作業効率の向上」のもと、農業、建設・インフラ、教育、学生生活、デスクワーク支援など、実社会の課題に挑む提案が集まりました。高く評価された作品は、AIやセンサ等を使う理由と効果、利用者に負担をかけない運用まで具体的に示していました。一方で、現場でのロバスト性、独自のアルゴリズムや解析ロジック、効果を示す評価指標には、さらなる深掘りを期待します。

自由部門では、日常生活、教育、福祉、防災、地域文化、観光、環境、エンターテインメントなど幅広い分野から、自由な発想と挑戦的な作品が寄せられました。利用者の行動や心理、実際の利用場面まで考えられた提案は説得力がありました。一方で、対象者や解決範囲、データ処理・評価方法、安全性やプライバシーへの配慮が曖昧なものもありました。本選では、「面白い」から「安心して使い続けたい」へと磨き上げてください。

競技部門では、「ヘキサうどん」をテーマに、多くのチームが工夫や独創性を明示し、図を用いて戦略や構成を分かりやすく示していました。一方で、図の説明や実装方針の具体性が不足するチームには条件付き通過を適用しました。また、条件付き通過ではないチームも含め、開発予定期間のガントチャートが十分でない例が多く見受けられました。余裕を持った開発計画のもと、万全の状態の本選に臨んでください。

今回の予選審査では、各部門ともボーダーライン付近に優れた作品が集まり、審査は大変難しいものとなりました。予選を通過したチームには、本選までの期間に、動くものをつくるだけでなく、なぜ価値があるのか、どのように検証したのか、今後どこまで発展できるのかを、プレゼンテーションとデモンストレーションで明確に伝えることを期待します。惜しくも通過に至らなかったチームにとっても、今回の挑戦で得た着想、調査、議論、試作の経験は、必ず次の一歩につながります。

10月の高松本選では、「香川で打つ、挑戦のアルゴリズム」のスローガンのもと、香川の地にふさわしく、しなやかで粘り強い発想と、確かな技術に裏打ちされた作品に出会えることを楽しみにしています。高専生らしい自由闊達な発想、実装への情熱、そして社会を少し良くしようとするまなざしに、審査委員一同、大きな期待を寄せています。

以上